黙想:待降節第4主日 (C)

黙想のテーマ:「マリアは神の御業に委ねることができた」「神は想像できないような方法で人間に近づかれる」「救いの望みに対する答え」

マリアは神の御業に委ねることができた

神は想像できないような方法で人間 に近づかれる

救いの望みに対する答え

おとめマリアは、天使の「あなたは 身ごもって男の子を産むが、その子 をイエスと名付けなさい」 (ルカ1・ 31)という言葉に驚きました。しか し彼女は、自分の現在と将来が変わ ることになる神のご計画に対して、 徐方に暮れることなく、落ち着いて 信念を込めて言いました。「わたし は主のはしためです。お言葉どお り、この身に成りますように」(ル カ1・38)。この単純な言葉は、驚く べきことに、神がこの世に入り込む ことを望まれた門になり、そしてま た私たちにご降誕を迎える週を始め させてくれるものになったのです。 「『私は…です』、これは人生の鍵 となる言葉です。自分自身と自身の 必要事を含む、地上的な平面図に、 神に至る垂直の歩みが伴っているの が人生です。『私は…です』は、主 に自由に使っていただく在り方を意 味し、利己主義を矯正する法であ り、何か不足するといつも不平をこ ぼす牛き方の解毒剤ですし、

「エフラタのベツレヘムよ、お前は 氏族の中でいと小さき者。お前の中 から、わたしのために、イスラエル を治める者が出る| (ミカ書5・1) と、ミカ預言者が言いました。慎ま しい女性が神の御母となり、無名に 近い村がメシアの出生地になりま す。これが、神の行動法です。私た ちも、ほんの小さなことに信仰の 伴った応え方で、日常生活を神の偉 大な仕事にできるのです。私たち は、日々の様々な時、友人との思い がけない出会い、時に単調に過ぎて 行く仕事の時間、あるいは楽しい家 族的な夜の集いなどにおいて、神の 招きに応じることができます。

待降節は終わりかけていますが、私 たちはその間、馬小屋にいろいろと 手を加えたりして楽しみました。 迷ったり、幼子イエスとは反対の方 を向いたりしている小羊をきちんと 置き直したり、馬小屋の牧歌的な雰 囲気を壊さないようにと、周りのコ ケが乾燥しないよう気を付けたりしたのでした。このたわいない事柄が、神のかすかな呼び掛けに応えたいと望む信仰の姿であるようにしたいと思っています。主よ、お出で下さい。遅くならないでください!私たちには御身が必要なのです。御身の来臨を愛情深く準備しようと望んでいます。

「神よ、わたしたちを連れ帰り、御 顔の光を輝かせ、わたしたちを連れ帰り、お がせ、わたしたちを連れ帰り。 には、おれていまののこれでは、詩編を見った言葉には、詩編することです。 ですることです。が満していました。 ですることを承がました。 は、とを承がました。 は、を承がました。 は、たてにまみだいました。 に死ぬと考えていまる。 に死ぬと考えていまる。 に死ぬと考えていまる。 に死めなることを多りなくにまみえ

「万軍の神よ、立ち帰ってください。天から目を注いでご覧くてくだささい。このなどうの木を顧みであると、作者はできるできる。では、人間の想像のであれたのである。単により、大きを訪ね、しているでででででは、次のようが、私に言われるです。私たちと共に生活されたのです。

「わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。人がわたしにつなり、わたしもその人につながっていれば、その人は豊かスにもないれば、まり、まり、まり、まり、は生気を与えられたのとは生気を与えられたちは生気を与えられたちは生気を与えられたちは生気をあるようにで、私たちは生気を与えられたちは生気を与えられたちは生気をあるようにでが人間となられたのになるためなのです。

は、先ず、神の御子を内的に迎え入れ、主を全生活の同伴者にすることです。 マリアとヨカン さいまった ちの温からい さいを 関連 でいる 変 にする とです。 学にない ない ない ました。 日常生活で いまびと、 困難の一つひとつ を がいまが といる でしょうか。

「天よ、露を滴らせよ。雲よ、正義を注げ。地が開いて、救いが実を結ぶように」(イザヤ45·8)。待降節第4主日の入祭唱は、私たちを救う神を知る必要のあることを、異常なほどの性急さで表明しています。私たちの祈りには、種々の機会に、ことが表れることでしょう。多くの場合、自分の限界を感じたり、傷の痛

みを感じたりするとき、小さな思い やりを喜んだときのように、全てを 神の愛に浸されたものであるように したいと望んでいます。主と共に生 きることは、自分だけに閉じ籠って いるあり方をとは、根本的に違うこ とに気づきます。

ミサの第二朗読には、キリストが人 となられた理由が明示されていま す。「わたしは来ました。(…)神 よ、御心を行うために」(ヘブライ 10.7)。御子は、私たちを救うため 人となることを望まれました。そし て、この救いは、ひとえに、私たち への限りない御父の愛に依ることな のです。「神は、その独り子をお与 えになったほどに、世を愛された。 独り子を信じる者が一人も滅びない で、永遠の命を得るためである| (ヨハネ3・16)。馬小屋の幼子を眺 めると、私たちに対する神の愛と、 優しいご保護を確信しないではいら れないでしょう。私たちの存在の一

部になっている全ての出来事において、神が私たちに話し、私たちを 救ってくださることを確信すること ができます。

御母が、御子が貧しい馬小屋で生ま れることを、どれほど寂しく思われ たか想像できます。しかし又、人間 の目には非常に情けない出来事にお いて、光輝く神を見ることになるで しょう。「真に偉大なことは、度々 気づかれないものです。穏やかな静 寂は、街特有の慌ただしさよりも実 り豊かなものです」ほん私たちも、 日常生活の細々とした全てのこと に、神を感じ取ることができるよう に、聖母の感受性と信仰に満ちた心 を頼みましょう。こうして、懐胎し た聖母の訪れに、母の胎内で飛び上 がって喜んだ洗礼者ヨハネのよう に、私たちも、イエスのご降誕を思 い起こして喜ぶことができます。

- [1] フランシスコ、「お告げの祈り」でのことば、2018年12月8日。
- [2] 聖ホセマリア『鍛』274番。
- [3] ベネディクト16世、講演、2012 年12月8日。

pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/meditation/mokusou-taikou-4nichi-c/ (2025/12/13)